

虐待防止研修会報告

所長 村井誓子



12月21日、1月13日の2日間、虐待防止研修に参加しました。1日目は「障害者虐待の対応について」県の担当者より話があり、その後「虐待防止を推進する～支援のあり方を不断に点検し向上させるために～」と題して埼玉大学教育学部准教授、宗澤忠雄氏より講義がありました。年々虐待件数は増えていること、国及び香川県の実施後の状況について障害別、従事者の職種別にも説明があり、全国的には生活支援員の次に管理者等が多いという実態に驚きました。講義では「虐待防止法の土台は社会の一員としての市民性、市民権の保障である。虐待は特別な人がおこすのではなく普通の人がおこし様々な小さな要因が重なっておこる。誰にも不適切な支援をする可能性がある。完璧な支援者ではなく、だからこそほどよい支援者であろうと努力する。そのためには限界や足りないことを開示し点検し合い、より良い方向へ持っていく姿勢が必要である。その条件として己を知り相手を知り、自覚をすることが大事であり、職場で進んで話し合うことが大切である。」との話がありました。本当に一市民としてどうなのかと考えた時にはおかしなことが多々あり、その錯覚してしまうのは経験を積んだ支援者ほど陥りやすいということは理解できます。立場のある、経験を積んだ私自身が新しいことを絶えず勉強し、権利条約を指針にして、それらの不適切な支援について話がしやすい職場環境を作る役割であるということを変更して学びました。2日目は、講義とグループワークがあり、身体拘束・行動制限の廃止と支援の質の向上、通報の意義と通報後の対応、虐待が疑われる事案への対応、運営者の責務と虐待防止委員会という研修内容でした。私自身を含めて誰でも虐待をする可能性があるという前提があるからこそ組織で取り組まないといけなことがよく理解できました。それを踏まえたグループワークでは虐待防止委員会の設置の仕方を学び、また各事業所での具体的な取り組みの情報交換もでき学びの多い研修会でした。

2020年新作クッキーの報告です！

何度も試作を重ねて販売まで至りました。内々でも賛否両論ありながらも夏期限定販売をやりきりました。チョコミント味、エッセンスとミント茶葉を使用した爽快感が魅力です。

冬気限定商品は現在も販売中のチーズ味。チーズの塩気と生地の甘みが意外にも合います。駄菓子屋はもちろん、委託先やゆめタウン販売でも一袋200円でお買い求めできます。ぜひ一度、お楽しみください！



駄菓子屋たんぼ営業時間

毎週月～土

10時～17時

火曜日のみ15時30分まで



編集後記

コロナが流行し、生活様式も変わり、行きたい場所にも会いたい人に会う事もままらなくなりました。「安定・安心」と、この仕事をする中でもよく聞かれますが、そのことの大切さを言葉ではなく体感として理解できたような気がします。なにかに怯えなくてすむ日常が早く戻って来ますように。また、それと同時に誰にとっても安心して通える場にしていきたいと今まで以上に思います。

LIFE

第68号 2021年2月1日発行

特定非営利活動法人SAJA (サヤ)
就労継続支援B型事業所 たんぼぼ
相談支援事業所 POPO
〒763-0066 丸亀市天満町1-2-31
TEL: 0877-22-2840
HP tanpopo-saja.com



社会的排除への対抗策

理事長 西谷清美

関係機関、関係者の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。平素より大変お世話になっています。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

さて、昨年からいっこうにその感染力を弱めることなく、私たちの身体と心、そして社会生活に大きな影を落とすつつある新型コロナウイルスですが、NP0 法人サヤでも他の事業体、組織体と同様に万全な感染防止対策を講じて日々の活動を展開しているところです。

今号では、私たちが社会福祉分野の事業者として、また支援者として常に心の片隅においておかなければならない事柄についてお話してみたいと思います。単刀直入に言うと、私たちは障害をもつ人々の社会的排除に加担してはならないということです。社会的排除とは、物質的・金銭的欠如のみならず、居住や教育、社会サービスや雇用(就労)等の社会生活上の多次元の領域において個人が排除され、社会的交流や社会参加さえも阻まれ、徐々に社会の周縁に追いやられていく(周縁化)ことを指します。

ここでいう周縁化とは、境界線の外側に追いやられるということであり、境界線とは実際の障害の種類や程度、支援の必要度等とはほとんど関係なく、むしろ障害をもたない市民が描く疾病や障害のイメージ(噂や神話、言い伝え、予断や偏見を含む)によって引かれている線のことです。障害をもつ人々の他にも周縁化された人々がいます。在日外国人や被差別部落出身者、LGBTの人たち、そして女性も当てはまるでしょう。過去には琉球の人たちも対象でした。私たちの社会では、一旦周縁化されたグループに属すると、生涯にわたり、身体的・精神的・社会的・経済的に負の影響を被り、生活のしづらさを抱えることとなります。理由は特にありません。精神病だから、外国人だからということで、「だから」に続くその人のことをその人ではない他者が勝手に決めてしまいます。たとえば「精神病だから怖い人、何をするかわからない、理解不能」とか「外国人は礼儀知らず、アジア系外国人はあらゆる面で我々より劣っている」、「同性愛者の多くは病気である」等々です。これらは、直接その人に向けられた言葉として顕在化するのではなく、誰もが無意識のうちに言葉や行動の端々にニュアンスとして醸し出すメッセージなのです。

周縁化されることは、その本人にとって直接的ではないにしろ社会的排除に直結する極めて深刻な事態です。現状のままでは、障害をもつ人々は障害福祉施策のサービスを利用すればするほど障害福祉枠から逃れられず、かえって障害者のレッテルを強化することになりかねないということです。もちろん、そうならないための策を講じるのが専門職なのですが、現状ではこのことが上手く解決できているとは到底思えません。

ところで、冒頭に述べた私たちが社会福祉分野の支援者として忘れてはならないこととは何でしょうか。それは、人の属性とはその人の皮膚の内側にあるのではなく外側にあるということ、変わるべきはその人ではなく社会であるという考え方です。そうでなければ、誰もが他者を周縁化させ、社会的排除に晒すことが可能になります。(続く)



現に、私たちは自らが認識しているか否かに関わらず、特定のグループ(障害者、外国人、被差別部落出身者、LGBT、女性、特定の地域出身者、他)に属する人たちに對して日常的に周縁化を強めています。善良で良識があり、他者の人格や権利を否定するはずもない、公正と平等を信条とするあなたであっても、無意識のうちに誰かの社会的排除に加担しているかもしれないのです。

では、どうすれば私たちは互いに信じ合い、支え合って生きることができるのでしょうか。支援者に考えてみてほしいことが二つあります。その一つは、自分自身の中にある被害者性に向き合うことです。そのことは加害性の自覚にとって極めて重要な条件だと思います。何故なら、被害者としての自分を発見したときに初めて、加害者としての自分が被害者に何をしてきたのかという気づきが生まれと考えるからです。例えば、女性であればセクハラをされる、学生であれば教員によるアカハラを受ける等の被害の他、海外旅行先で「ジャップ」と揶揄される、黄色人種であることで空席があるにもかかわらずライブのチケットを売ってもらえない等の体験は、もちろんなければならないに越したことはありませんが、一方で普段自分自身がその他の生活の局面で他者に対してどのように接しているのかを思い起こす契機となることは確かです。

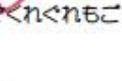
そしてもう一つは、やはりこの国において障害をもつ人々の多くが社会的排除の状態に晒されようとしている事実を受け入れることです。障害を持つ人々に限定される問題ではありませんが、いつの時代にも、また洋の東西を問わず近似の事象を確認することができます。つまり、破綻や困窮、そして排除は弱い立場の人の身の上からスタートするということです。「今日、食べるものが手に入らない」「安心して眠る場所がない」等の生活保障(生存権)や「十分な教育が受けられない」という教育保障(教育権)、さらには「仕事が見つからない」「解雇された」等の労働保障(働く権利)等が欠落し始めるということなのです。

これらの事象への解釈や評価を個人の自己責任に帰させるというのが現代風の社会福祉だとするならば、あえて私たちは社会福祉職を名乗る必要はありません。早々と撤退することをお奨めします。そうではなく、これからも社会福祉分野の支援者を自負し、その方法や哲学を全うしようとするならば、自分自身の他者性に向き合い、知らない誰かの身の上で起こっていることが自分自身につながっているということを知覚する必要があります。つまり、他者を主流グループから周縁化(侮辱、非人間化、無価値化等を含む)させているという無意識を意識化するという極めて福祉的で人間的な作業の繰り返しこそが、社会的排除という事態への対抗策であるということなのです。

新しい年を迎えて、NP0 法人サヤは近代的な新しい何かを手探りで始めるということではなく、古臭いかもしれませんが、目の前のその人の人生に起きていることにしっかりと向き合っており、各事業を進めて参ります。

関係者の皆さんには、益々のご協力、ご支援のほど、何卒宜しくお願いいたします。

最後になりますが、新型コロナウイルスの感染拡大は今しばらく続きます。皆さんにはどうぞくれぐれもご自愛ください。



インプロ



二か月に一度ほど土曜日に、四国学院大学より仙石先生、並びに劇団員の方に来ていただき、演劇のインプロを新しい取り組みとしてしています。インプロとは日本語では即興演劇と訳されるようで、プログラムの度に参加者たちで作った物語を演じていく、という時間です。福祉分野を勉強してきた私としては全く新しい世界であり、参加メンバーと共におっかなびっくりしながら始まったのですが、楽しいことが好きなメンバーの勢いに押され、毎回笑いの溢れる会となっています。流動的なプログラムで、今後どんどん発展していく予感があります。たんぼぼの Facebook に、その都度写真を載せているので、ぜひ見てください!

精神保健福祉士 山崎春菜



今、飞けること。

コロナ禍の中、なかなか状況が良くならないまま2020年も終わり2021年を迎え、一日でも早く平穏な生活ができるよう祈るばかりです。

事業所でも新型コロナウイルスは大きな影響を与えました。日帰り旅行、夏の宿泊研修、歌芸大会の自粛や、緊急事態宣言を受けて、飲食店の時短営業、イベントの中止等でメンバーの工賃となる売り上げが減少するなど、様々な活動が制限されました。しかし、何もできなかった訳ではありません。一年振り返ってみると「今だから出来る事!」をテーマに、色々な事にチャレンジしました。まずは雑貨班、コンセプトは「今がチャンス!」今までできなかった事、やってみたかった事を失敗してもいい、とにかくやってみる良い機会として、編み物上達させる人、新しい雑貨作りをする人等、自分のスキルを磨くなど時間を有効に使い、作品作りを行いました。次に工賃の柱となっているクッキー、製造班の新品販売を受けて、営業班の主要メンバーが委託先の開拓にも力を入れました。緊急事態宣言解除後の少し落ち着いたタイミングで、営業に行き3件の委託先が増えました。この時期に快く引き受けてくれたお店の方には感謝しかありません。新しい委託先を増やすため営業は現在進行中です。またタイミングを図って動いていこうと思っています。2020年はコロナの話題なしでは過ごせない日々が続いた様な気がします。何でも無いいつもの日常がどれほど大切なことだったかを思い知る事ができた一年でした。2021年はどのような年になるのかまだまだ未知の状況が続きますが、必ず元の日常が取り戻せるはずと信じて2021年も活動の幅を広げて行けたら良いなと思っています。



★きりりもち麦強化月間★

所長 村井響子

11月12日から12月末まで、もち麦販売強化月間でした。この取り組みは10月のコンサルタント会議(理事長に任命されたコンサルタント3名と理事長、所長にて定期会議を3ヶ月に1回開催)にて販売推進コンサルタントの前田氏から提案があり進めることとなりました。もち麦が美味しく身体にも良く好評とのこと、もち麦をまず押ししたいとのことでした。今後チーズクッキー、焼き芋なども順次、強化販売する予定です。後に理事長より強化月間部長と任命され、メンバーミーティングにて販売推進コンサルタント兼強化月間部長の前田氏より提案がなされました。その会のなかから、もち麦についてどのように身体に良いのか自分達が勉強して知らなければお客さんにきちんと説明できないとの意見があがりました。そこで仕入先の方に依頼して来てもらい勉強会をおこないました。その後は数人のメンバーの心に火が付きまして、チラシを販売先で配り、知り合いに手渡し、声掛けをして徐々に販売数が増えました。年末には30個の目標も達成(35個販売)し、新しいお客とリピーターも増え大きな成果を収めました。販売については、それぞれのメンバーで温度差があったのは事実であり、足並みは揃わずとも無理やり揃えようとはしない『たんぼぼ』の良さがありますが、そんななかでも協力して目標を達成でき、もち麦販売強化月間は大成功だったと思います。

